

研究所だより

「温暖化とともに上手く生きる」時代の到来？

今年2月に発表された IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第1作業部会第4次評価報告書では、人為起源の温室効果ガスの増加が世界の平均気温上昇の原因とほぼ断定しました。「地球温暖化防止のために二酸化炭素の排出を抑制しなければならない・・・」地球規模で伝えられる異常気象の報道に触れるたびに、多くの人がそう感じます。

ところで、今のところ我が国では議論にあがる機会が少ないようですが、このように排出量を削減する「緩和策：Adaptation」とあわせて「温暖化とともに生きる」時代の到来を受け止めた「適応策 Mitigation」（例えば、沿岸防護を強化するとか、農作物の植付け、収穫時期を変更することなど）を補完的に推進する「統合的アプローチ（Integrated Approach）」の重要性が IPCC などでも指摘されています。これは、途上国のように気候変動に対して脆弱な地域であるほど重要であるといわれています。温室効果ガスの排出量を削減するためには多額なコストが必要ですので、削減対策にこの適応策を組み合わせる実施したほうが、トータルでの社会のコストが軽減されるのではないかという考え方です。

そろそろ地球温暖化を現実のものとして受け止め、これとしっかり向き合った、「緩和」「適応」の「Best Mix」を真剣に考える段階に来ているような気がします。

加納

編集者から

「サステナブル・エネルギー特集」の2号目です。本号では、ベストバリューでは初めての外部の有識者による座談会を開催することができました。この分野の第一人者による熱い議論、メッセージが皆さんにしっかりとお届けすることができれば何よりでございます。

昨年のエネルギー特集1号の小欄で、我々のミッションを、「理論や調査に留まらず、それを実践に結びつけること（ドゥータンク）」と書きました。あれから1年、これがどれだけ実践できたのか自問自答の繰り返しです。

新しいエネルギー社会システムを作るということは本当に大変なこと。関与する多くの皆様の英知を結集してこれからも精進して参ります。我々の取組にこれからもよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

なお、本号の発行にあたっては、多方面に渡る皆様のご指導とご協力を頂きました。ここに改めて厚く御礼を申し上げます。

加納